

歴史・文化からみた日本の川 —日本人と川—

Study on Japanese rivers in view of history and culture — Japanese and rivers —

研究第一部 主任研究員 川井 正彦
研究第一部 部 長 水野 雅光

古代より稲作を行ってきた我々日本人は、河川と密接に結びついた生活を営んできており、このつながりは、文学や絵画、能や歌舞伎など様々な芸術や文化に豊かに、かつ、多彩に表現されてきた。それらは、失われつつある川の風景や自然、希薄になってしまった人と川の関わり、消えつつある川と密着した生活など様々な貴重な情報を現代に生きる我々に示唆してくれる。

また、これら表現された芸術や民俗のあるものは、地元だけでなく、広く全国にも知られるようになり、日本人特有の河川観をつくり上げるのに寄与した。そういった意味で、川は日本人の精神活動の最も深い部分に根ざした要素の一つであると考えることができよう。

地域の歴史・風土に根ざした川づくりを推進し、個性ある地域づくりに資するためには、様々な分野の知見を集めた共同研究として取り組んでいくことが必要であり、同時に、地元の文化、歴史、風土に精通している地域の住民との連携が不可欠である。

キーワード：歴史・文化、個性ある地域づくり、日本文学、和歌、俳句、今様、芸能、歌舞伎、能、民俗、川の民、祭り、絵画、映画、近代文学

The Japanese people have long practiced rice cultivation, so their lives have been closely related with rivers, and this relationship has been richly and variously expressed in many works of art including literature, painting, *noh* and *kabuki*. These works of art give us various invaluable information on, for example, riverscapes and nature that are now being lost, the dwindling relationship between people and rivers, and lifestyles closely connected to rivers that are now disappearing.

These works of art and ethnicity, which have become known not only among local communities but also to the rest of the country, have formed views on rivers that are peculiar to the Japanese people. In this sense, it can be said that rivers are among the elements that are most deeply rooted in the minds of Japanese people.

In order to create a river that goes well with the history and natural features of an area and help to build an area with a distinctive personality, it is necessary to conduct joint research to integrate knowledge gained in various fields. Cooperation with local residents who are well versed in the history and natural features of the area is also essential.

Key words : *history and culture, building a community with personality, Japanese literature, waka (Japanese poetic style), haiku (Japanese poetic style), imayo (Japanese traditional popular song style), performing art, kabuki, noh, ethnicity, river people, festival, painting, movie, modern literature*

1. はじめに

古代より稲作を行ってきた我々日本人は、河川と密接に結びついた生活を営んできており、このつながりは、文学や絵画、能や歌舞伎など様々な芸術に豊かに、かつ、多彩に表現されてきた。また、これら表現された芸術は、地元だけでなく、広く全国にも知られ、日本人特有の河川観をつくり上げていった。

すなわち、清冽な水、山紫水明の景観、移ろいゆく淵瀬などに代表される我が国の川の姿は、多くの文人や画人に表現され、そして、その作品を通じて日本全国に広められることによって、地域固有の川の姿（名所、歌枕など）や川の持つ無常感などの特有の河川観をつくり上げていった。

これほど豊かに、そして多彩な川の芸術を有する国民は、日本人を除いて世界的にそう多くはないと考えられ、川というものが、我々日本人の記憶の奥底にまで入っているということであらわしているものと考えられる。

また、地域固有の川の個性は、地域と川との関わりの中で、さまざまな民俗を育んでいった。例えば、洪水の常襲する地域では、川の怒りを収めるための祭りや洪水に関わるさまざまな言い伝えが多く残されており、これに対して、渇水の恐れのある地域では、川や水の恵みへの感謝をささげるための祭りや雨乞いなどの行事が多く残されている。

このようなことから、一つの川・流域の歴史や風土を表現した俳句・和歌などの文学や絵画などや地域・流域で生まれた川や水に関わる民俗を空間的・時間的に系統立てて収集・整理することにより、川から見た歴史・風土、すなわち、その川が持っていた個性・役割・特徴を浮かび上がらせることが可能となる。

2. 歴史・風土にみる川の姿

2-1 詩歌にみる川の姿

清らかで変化に富む川の流れ、川で生活を営む人々の姿、千鳥や氷魚（ひお：鮎の稚魚）に代表される川の自然など、四季折々の川の風景は、古来、多くの文人に愛され、和歌や俳句に表現されてきた。

例えば、我が国最古の歌集である『万葉集』では、飛鳥川を次のように詠んでいる。

・明日香川しがらみ渡し塞（せ）かませば流るる水ものどにかあらまし

・年月もいまだ経なくに明日香川瀬瀬ゆ渡しし石橋もなし

ここから、飛鳥川が非常な急流であり、石橋も頻繁に流されてしまっていた様子を想像するに難くない。こ

のような川の激しい流れ、移りゆく淵や瀬の姿は、月日の流れの早さの比喩として使われることも多かったが、やがて、『方丈記』の冒頭に見られるような、人の世の移ろいやすさ、無常観へとつながり、緩やかな流れの大陸では育たなかった、日本人独特の河川観が形成されていくのである。



飛鳥川の流れ（明日香村 HP より）

また、和歌に詠み込まれる歌詞（うたことば）や歌を詠んだ場所そのものを指すものとして、歌枕がある。歌枕は、古代から人の行き来した地域や、著名な歌人や歌を詠むような貴族たちが通った地域について多く残っており、平安時代に京都にいた知識人たちの頭の中にあつた日本列島の地域ごとに生まれたさまざまな歌が、網羅・分類されて残されている。

例えば、12世紀に作成された『五代集歌枕』によると、地名を含んだ1883首を「山・嶺・・・野・沢・・・社・寺・・・海・江・・・浜・潟・・・道・橋」といった地形や景物毎に分類して整理しており、また、14世紀の『歌枕名寄』では、各地域、国毎に歌枕を詠み込んだ歌を整理している。

このように、歌枕は、和歌に詠われた地形を分類し、その地形が存在する地名を特定するとともに、その地名を詠み込んだ歌を集めた一種の文化のインデックスとなっており、現代の日本で失われた地名や当時の日本人の心に残った風景の索引ともいえるべきものである。日本の主な川は、平安朝のころに歌枕によって整理されており、『万葉集』以来の日本の勅撰歌集の中に出てきたような歌、そこに詠み込まれた地名、川の名前が網羅されており、地名や川の名前から歌が引けるようになっている。このことは、歌枕となった川が、当時の人々にとって、重要な、あるいは、かわりの深い川であったことを示すものであり、今日で言う「一級河川」に相当する存在であったと考えることができよう。

なお、平安の後期ぐらいになると歌学びの本ができ、歌枕がリストアップされ、平安から室町にかけては京の都人が実際には出掛けもせずに歌に詠み込むという

使い方がされていたため、歌枕として想像された川と、人間が実際に生活している現実の川の姿との違いには留意する必要がある。

一方、俳句に着目して川の姿を求めると、芭蕉と蕪村という二大俳人に出会う。彼らは伊賀上野と毛馬という生まれた場所こそ違うが、奇しくも同じ淀川水系の水を飲んで育っており、川にまつわる不思議な縁を感じさせる。彼らは、その俳句の中で川に関する多くの句を残しており、川が彼らの作品の中でいかに重要であったかを想像することができる。

例えば、伊賀上野の木津川支川の服部川という小さな川の近くで生まれた、芭蕉の末期（時世の句の後に詠んだといわれる）の句では、

・清滝や波に散り込む青松葉

と詠んでおり、自分を青い松葉に重ね合わせ、清滝川に散り込んでいく様を詠みあげている。

また、淀川下流の毛馬で生まれた蕪村は、淀川やその近くの風景を多くの句で読み込んでおり、

・花いばら故郷の道に似たるかな

・うれひつつ丘にのぼれば花いばら

などと、「花いばら」と母の面影を重ね合わせ、そして、故郷毛馬の川沿いの道を思いやっているのである。

また、俳句や和歌をひも解くと、『奥の細道』に代表されるように一種の詩的地誌とも言えるくらいの現地の地形に関する把握力を持っているものがある。例えば、松尾芭蕉が奥の細道で詠んだ、

・五月雨をあつめて早し最上川

の「あつめて」という言葉の中には、最上川の背景にある山々に五月雨が降り注ぎ、それが滝になり、谷川になり、支流になって、最上川に合流することを見事にとらえ、舟に乗ってみたときの川の流れの実感として表現している。

さらに、古代の歌人である柿本人麻呂も

・穴師川川波立ちぬ巻向の弓月が岳に雲ゑ立てるらし
と「穴師川の川波が高いから、巻向山にきつと嵐が来ているのだらう」という歌を詠んでおり、古代からの俳人や歌人が、地理的な観念を持ち、地域の川の特徴を踏まえて周囲の山や川を詠っているという、世界的にも希少な特性をもち、すでに流域単位概念を持て合わせていたことが伺える。

2-2 今様にみる川の姿

今様は、平安時代から鎌倉初期ぐらいまでの300年ほどの間に広く流行した歌謡或いは民衆歌謡というもので、今日でいう歌謡曲に相当する。

この今様には、人と川との関わり合いを謡ったもの

が、替え歌も含めて非常に多くあり、そこから当時の川が、人々の暮らしにいかに大きく関わっていたかを伺うことができる。また、今様は淀川と関わりが深く、多くの今様が淀川とその水系で謡われている。これは、淀川が大阪湾あるいは瀬戸内海と都を結ぶ交通の要所であり、多くの人が行き来し、そして、それら旅人を接待する遊女たちが、今様を謡っていたことに起因するものである。

例えば、後白河法皇が編集した『梁塵秘抄』をひも解くと、

・淀河の底の深きに鮎の子の 鵜といふ鳥に背中食はれてきりきりめく いとをしや

・鵜飼はいとほしや 万劫年経る亀殺し 鵜の首結び 現世はかくてありてもありぬべし 後生我が身をいかにせん

のように、鮎や鵜飼の姿と遊女である自分の境涯を重ね合わせ、身を削る思いや業の深さを嘆く若い女性の姿を見出せる。また、

・八幡へ参らんと思へども 賀茂川桂川いとはやし

あなはやしな 淀の渡に船うけて迎へ給へ大菩薩

・思ふ事なる川上に迹垂れて 貴船は人を渡すなりけり

のように、現世のしがらみ、彼岸と此岸を分ける境として、川を謡いこみ、浄土にわたる救いを求めるものや、

・いづれか法輪にまいる道 うちの通りの西の京 それ過ぎてや 常盤林のあなたなる 愛嬌流れくる大堰川

・嵯峨野の興宴は 鵜舟筏師流紅葉 山陰響かす箏の琴 浄土の遊びに異ならず

のように、当時の川の姿や風俗を謡いこんだものなど、様々な今様が納められており、その風景の中に当時のどんな日本人がどんなことを考えていたのかを伺い知ることができる。

また、今様には、神（若宮）にささげる謡という特徴もあり、巫女が今様をささげると、神（若宮）も巫女の口を通して今様を返すということになっているのである。

このような若宮信仰と川のかかわりの姿は、

・大将立つといふ河原には 大將軍こそ降り給へ あづちひめぐり諸共に降り遊ふ給へ大將軍

に見られるように、「天から降りてくる神は、河原に降り立ち、そして河原で遊ぶ」と信じられており、故に河原かその近くに神社（若宮）を建立し、新たに発生した疫病などの災いを鎮めてもらうということになるのである。

このように、中世の社会において、川とその周辺は、交通の要所としてだけでなく、遊興の場、信仰の場として、非常に重要な役割を果たしており、このような川の姿、人と川との関りは、当時の流行歌であった今様に、特に強くにじみだしているのである。

2-3 歌舞伎・能にみる川の姿

前述したように、中世の社会において川とその周辺は、交通の要所としてだけでなく、遊興の場であり、信仰の場であった。このため、今日まで残されている伝統芸能においても川とのかかわりが深いものがある。

歌舞伎は江戸時代の初頭に、出雲の阿国が異端な風体の男性（「かぶき者」と呼ばれる）に扮し「かぶき踊り」と呼ばれる踊りを四条河原（資料によっては五条河原）で踊ったのが初めとされ、その発祥から川とのかかわりが深い。

歌舞伎の演目で川が重要な舞台をしめる代表的なものとしては、「青砥稿華紅彩画（あおとぞうしはなのにしきえ）」（別名「白浪五人男」、「弁天小僧」など）の稲瀬川勢揃いの場面や「隅田川」、「三人吉三」の大川端の場面などが挙げられよう。

一方、能についてみると、現在演じられている全243演目のうち「愛染川」や「桜川」を始めとして、30演目程度で川とその周辺での場面が演じられているようである。これら演目において川は、人や神、霊との出会いの場であることが多く、川が中世以降、交通の動脈であり人の集まる場であったことが理解できる。

2-4 民俗にみる川の姿（川の民の記憶）

かつての日本には、川を生活の場とする「川の民」が各地にいた。

井上鋭夫の「山の民・川の民」によると、彼らは、法印と呼ばれる山伏たちに従って、実際に金堀などの仕事をしてきた「山の民」であり、近世になって、法印たちが金堀などから撤退すると、彼ら「山の民」も山を降り、川沿いに定住の地を求めて、そして「川の民」となり、交易や物資の輸送、塩木流し、筏流しなどといった生業についていったものと考察されている。

例えば、最上川において、彼ら川の民の暮らしを追いかけると、今はほとんど消えてしまった「渡し場」「渡し舟」に出会うことができる。なお、最上川流域では、渡し舟の船頭を「タイシ（太子）」と呼ぶことが多いようである。

また、地方に残されている民話や伝承の中にも、川

の民の姿を見出すことができる。

例えば、最上川流域に残されている『サケの大助』という有名な伝承では、サケが遡上するときにはサケの声（伝承では「サケの大助、今上る」と言うとき）を宴会などをして聞かないようにするという伝承がある。これは、川を遡上し、産卵するサケに対し、遡上時に漁をしてはならないという水産資源を保護する教えを与えるものであり、ここにも川の民の姿が垣間見えよう。

2-5 祭りや信仰にみる川の姿

「今様にみる川の姿」で述べたように、中世の日本において、川や河原は神々が降り立ち、遊ぶところと考えられていた。また、神話についてみても、例えば、天照大神が岩戸にこもって、困った神々が相談する場所は、「天安河原」と呼ばれる河原である。

このように、川や河原は古代から、神々が集まる神聖な場所として、日本人の信仰の対象となってきたと考えられ、これ故に、川沿いに多くの神社が建立されたのであろう。

京都を代表する賀茂川についてみると、一番下流が稲荷神社、祇園神社、それから下賀茂神社、上賀茂神社の両社、さらに上って、貴船神社（賀茂神社の若宮と言われる）というように、賀茂川沿いに多くの神社が建立されていた（京都は元々賀茂川の西側が中心地であったが、やがて、賀茂川の治水がしっかりなされてくると、東側に新しい場が形成され、洛中を此岸、それに対し、賀茂川の東側を彼岸とするようにならえ方もされるようになった）。

なお、川に関わりの深い京都の祭りは多くあるが、上述の賀茂川の最上流にある貴船神社は、川をつかさどる龍神を祀る社でもあり、「止雨の祈り」や「祈雨の祈り」が今日にも残されている。また、京都の夏の風物詩でもある祇園神社の祭り（祇園祭）においても、元々は賀茂川にわざわざ舟橋をかけ、彼岸側の祇園から此岸の洛中へと、賀茂川の瀬を神輿が渡って、そして、再び返っていったものである。

一方このように、伝統的ではないものの、河川事業が一つの祭りを生み出すこともある。

例えば京都府北部を流れる由良川では、昭和初期の北丹後地震での災害復旧により、鋼矢板を用いた強固な堤防が築かれ、当時の災害査定官の名前を取って岩沢堤と名付けるとともに、現在も堤防に感謝をささげるため、毎年8月には堤防祭りが行われている。

また、北海道の夕張川においても、治水事業に貢献した技術者を祭り、治水感謝祭という祭りが続けられ

ている。

これら2つの事例は、その地域が苦勞して川と付き合い、時として、川と戦ってきた歴史を物語るものであり、地域の人々の河川事業に対する思いを感じることができる。

このように地域や川によってさまざまな形の信仰や祭りが残されており、地域の特徴やその地域の人々の川への思い、そして川との関わりの姿を見出すことができる。

2-6 絵画にみる川の姿

川の姿を描いた絵画は、古くより多くあるが、江戸期以前は様式化されることが多く、当時の川の姿が具体的に表現されるのは江戸時代以降と考えられる。

この江戸期以降の絵画で川は、遠近法を意識したパノラマ的な表現、あるいは、上流から下流、または、河口から上流へ遡上する連続画面形式の絵画として描かれていた。

パノラマ的な絵画については、18世紀末に西洋から遠近法が入ってくる以前に日本独自の遠近法で描かれていた浮世絵や覗き眼鏡を覗いて風景を見る眼鏡絵がある。



眼鏡絵（司馬江漢「三囲景図」（神戸市立博物館））

一方、連続画面形式のものとしては、18世紀末から19世紀にかけて描かれた「真景図」と呼ばれるものがある。

この真景図においては、現在、使用されている地図のような正確さはないが、一つの川の流れて見える景観を、実際どう見えるかということを超えて、あたかも旅をするかのごとく、恐らく、画家が美しいと思ったものや場所をことごとく取り込んで、一幅の絵の中に表現しようとしたものと考えられる。

このように、川を描いた連続画面形式で描いた絵画の場合、川を遡上、あるいは、下降するという「旅」を表現することによって、空間の移り変わりだけでな

く、時間の流れをも表し、一つの物語をかもし出す役割をなしていると考えられる。



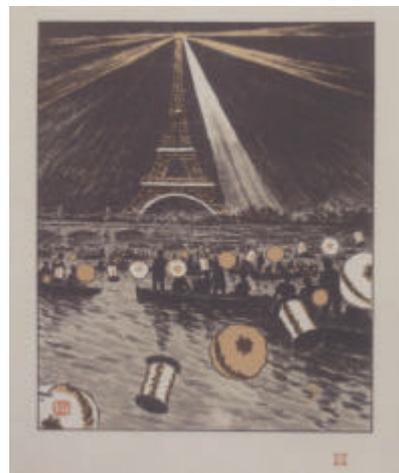
真景図（谷文晁「熊野舟行図巻」（山形美術館））

また、かつての川は、生活と密着した場所であったため、様々な絵画に描かれ、その中からその時代の生活や産業などを見てとることができる。例えば、江戸の名所図絵が描かれるにあたってテーマとされた場所は、意識的に選ばなくても何らかの形で水に関係した場所になるほどに、江戸の町は水辺、川と重要な関係にあった。



浮世絵（歌川広重「江戸名所三つの眺 両国夏の月」（北九州市立美術館））

このことは、浮世絵に影響を及ぼされたヨーロッパの絵画にも見られ、特に、浮世絵調に絵を描こうとしてこだわったのは川の存在であったようである。



アンリ・リヴィエール「エッフェル塔三十六景」（ニューオータニ美術館）

2-7 映画にみる川の姿

これまで述べてきたように、川は日本人の心の深い部分の一要素をなしていると考えられるが、このことは、歴史的な文学や絵画などにとどまらず、近代に作成された映画にも色濃く出ていることがある。

例えば、東京の低地を流れる荒川（放水路）についてみると、歴史の浅い川ではあるものの、実に多くの映画に取り上げられている。

1938年に作られた山本嘉次郎監督の『綴方教室』では、主人公の少女が、貧しいながらも、荒川の土手で子供たちと遊んだり、ウサギの餌となる草を土手に取りに來たりするシーンが描かれている。これらシーンは、全体に暗くなりがちで貧しい家庭で育った少女の情景を明るくおおらかに映し出すのに効果的に使われている。

同様に、1948年の小津安二郎監督の『風の中の牝鷄』は、全体に非常に暗い物語となっているが、この中で唯一、主人公が小さい男の子を連れて荒川にピクニックに出かけるという、川を舞台とした明るいシーンが挿入されているのである。

このように荒川が東京に住む人々にとって、身近な娯楽の場であったことは、1953年に作られた小津安二郎監督の『東京物語』にも描かれている。この映画では、尾道から東京に出てきた老婆が、長男の息子（老婆にとっての孫）と二人で、荒川の土手で遊ぶシーンがあり、ここでの印象的な台詞と併せて、この映画の名場面の一つとなっている。

また、永井荷風の短編を原作として、1955年に作られた久松静児監督の『渡り鳥いつ帰る』では、東京大空襲の戦火を逃れて荒川の土手に避難してきた中年の男女が、終戦後、再び荒川の土手で偶然出会い、恋が生れるといった物語であり、能での川での取扱いと同様、「出会いの場所」として川が取り上げられ、昭和30年頃の荒川の風景とともに描かれている。

このように、荒川だけについてみても多くの映画の中で表現されており、そこには、川を憩いの場として生きる人々の姿を垣間見ることができる。

このように、川は、多くの映画監督たちによって、さまざまな映画の中で描かれてきており、当時の風景を残す貴重な映像資料として、また、風景としての川の美しさを発見するものとして、重要な機能を果たしている。

2-8 近代文学にみる川の姿

近代文学にも川をモチーフや舞台として書かれた作品が数多くある。

例えば、永井荷風が隅田川を舞台とした『すみだ川』、多摩川を舞台とした室生犀星の『あにいもうと』、利根川を題材とした田山花袋の『田舎教師』、千曲川の風景をつづった島崎藤村の『千曲川のスケッチ』、北上川での思い出をつづった宮沢賢治の『イギリス海岸』、藤沢周平の『蟬しぐれ』や芥川龍之介の『大川の水』『本所両国』等も川を描いた近代文学と言えるだろう。

では、近代文学の作家たちは、いかに川を捉え、表現してきたのであろうか。例えば、『すみだ川』を著した永井荷風は、その著書『断腸亭日乗』によると、昭和7年から昭和8年にかけて、頻繁に隅田川沿いを歩いているのだが、沿川の市街化が進むと嫌になって、今度は、さらに東の荒川（荒川放水路）まで足を伸ばすこととなる。そこで彼は、荒川の茫漠たる風景（この当時荒川下流域は放水路完成後15年程度しか経ていない）に癒され、3日に1回くらいの頻度で荒川を訪れ、『瀧東綺譚』という名作を生み出すこととなる。

このように、川と文学の関わりをみた場合、例えば、国木田独歩が誰も見向きもしなかった武蔵野の雑木林を見て美しさを見出したように、それぞれの文人たちが、その川の風景の美しさ（万人がみて美しいと感じる物ではないのかもしれないが）を発見することが重要であり、また、併せて人と川との強いつながり、係わり合いの姿が見出されることが必要なのであろう。

3. まとめ

3-1 日本人と川

これまで述べてきたように、我々日本人はその国土条件から生み出される激しい川の流れ、清らかな流れ、山紫水明の景観から、様々な芸術や民俗などで川を取り上げ、日本人固有の河川観を育んできた。

それらには、失われつつある川の風景や自然、希薄になってしまった人と川の関わり、消えつつある川での生活など様々な貴重な情報を現代に生きる我々に示唆してくれるのである。

言うまでも無く、日本は諸外国に比べ、小さな流域が数多く存在する国土条件を有しており、それら流域の一つ一つがそれぞれの歴史・風土を育み、川とかわりあってきたことは、他に類を見ないのではないだろうか。

そういった意味で、川は日本人の精神活動の最も深い部分に根ざした要素の一つとして考えられるのではないだろうか。

3-2 歴史・風土に根ざした郷土の川を目指して

地域の歴史・風土に根ざした川を実現するためには、まず、流域単位で川の歴史、風土や文学、文化などを十分調査研究し、空間的、時系列的に整理することが必要である。このためには、河川工学だけでなく、文学や民俗学など様々な分野の知見を集めた共同研究として取り組んでいくことが必要であり、また、将来的に他分野の研究成果にもとづく加筆が可能な「柔軟な体制」とすることが必要である。

同時に、地元の歴史や風土に精通している地域の住民と十分な連携をとり、かつての姿や言い伝えなどの地元に残されている貴重な情報を「聞き書き」などの手法で引き出すとともに、得られた情報を共有しながら、地域の個性を踏まえた川の姿を議論していくことが重要であろう。

併せて、シンポジウムやワークショップなどにより、流域の歴史・文化を流域の住民に広く紹介し、地域や流域の個性とそこにおける川の役割、川で育まれた地域の文化などについて、より広く理解を深化し、川と地域とのかかわりを再構築するための機会を創出することも重要であろう。

なお、上述したように川に関わる様々な歴史・風土が育まれているのは、我が国固有の特性と考えられ、我が国の文化を諸外国に理解してもらうのに格好の材料と考えられる。このため、複数言語での資料の作成を心がけ、世界に向けて発信することも望まれる。

4. あとがき

近年の河川環境に対するニーズの多様化は、これまで主に生態系や自然豊かな景観などを主眼に議論されてきた。これらはいずれも、かつての川の姿や川と人とのかかわりを再構築することを念頭にしたものであり、それらが自然再生の取り組みへとつながっていったと考えることができよう。

そういった意味で、地域や流域の歴史・風土に根ざした川を取り戻そうとする取り組みは、これら自然環境に、芸術や民俗といった人文環境を加味し、広い意味で川の環境を捉え始めた取り組みであると解釈することもできよう。

なお、本稿は、「歴史・風土に根ざした郷土の川懇談会」での話題提供・議論を踏まえ、取りまとめたものであり、同懇談会の委員各位に謝意を表して本稿を締めくくりたい。